

グラウンド / 校舎

- グラウンドと校舎の関係から考える小学校の提案 -

ぐらんど わる こうしゃ

まちだ たかひろ



よくある学校の風景。
それは真っ平らで広大なグラウンドの端に、それとは対極するようにそびえ立つ校舎。
学校建築での配置計画における校舎とグラウンドの関係は、とても良いとは言いがたい。むしろ希薄である。

校舎とグラウンドがそれぞれ独立し、無関係に存在しているような学校ではなく、両者が支えあい共存しているような学校。
そんな学校をつくりたい。

校舎とグラウンドの関係を改めて考え直すことをきっかけに、今日的な学校のあり方を模索する。

はじめ

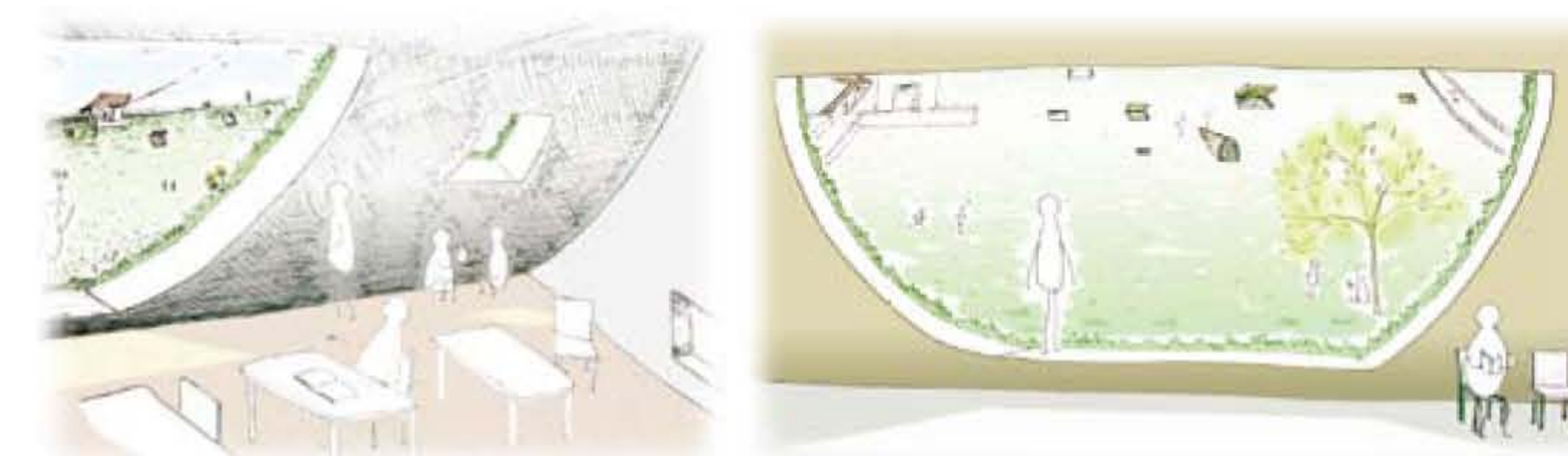
あるときふと思った。
「なぜ、学校建築の校舎とグラウンドは、お互いが対極しているかのよう存在しているのだろうか。」
それは、水平方向へ広がるグラウンドの端に垂直方向へそびえる校舎が建つという単純かつ極端な図式。
この図式がグラウンドと校舎の関係を希薄にし、対極しているようにみせているのかもしれない。
そんな図式を改めることはできないのか。
その方法として、下のアイデアを考えた。



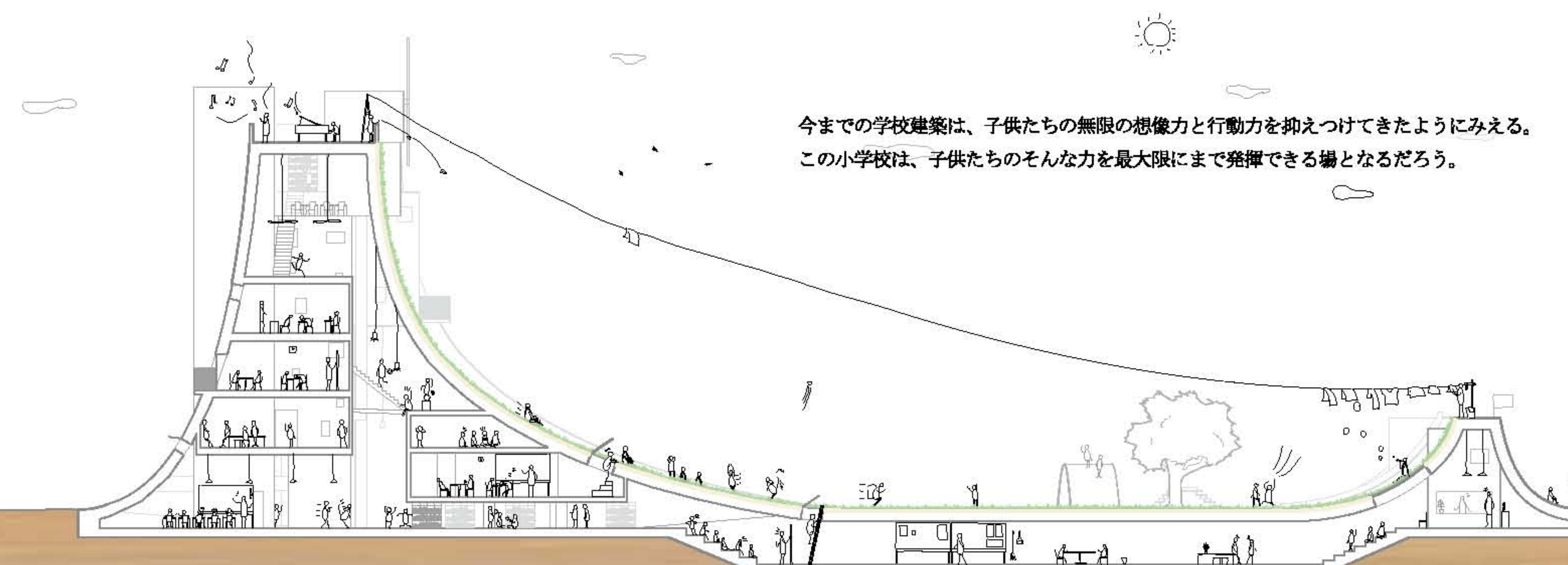
それは、グラウンド(地面)をめくり上げることでできる隙間を校舎とするイメージ。
そのイメージを拡張させ、めくり上げたグラウンドがそのまま屋根になり、山のような校舎を形作る。
こうすることにより、グラウンドと校舎に新しい関係が生まれる。



外部空間において斜面は走る・座る・すべる・登るなど、子供たちの行動を最大限にまで引き出す。そして内部空間では、斜面は天井や壁となり、その高さ・角度の変化が場所の質を変える。この斜面の変化は小学生の身体スケールにリンクしていて、各学年に見合った空間を与え、生徒は自分自身の成長の変化を感じる。



窓の外へ出ると目の前には土のような景色が広がる。このように内部から外部へ出たときに、劇的な空間の変化を体験する。
また、窓というものが、単なる開口ではなくることにより、内部と外部の関係は強くなる。



今までの学校建築は、子供たちの無限の想像力と行動力を抑えつけてきたように見える。
この小学校は、子供たちのそんな力を最大限にまで発揮できる場となるだろう。

講評

小学校の計画である。グラウンドと建物との関係に注目し、新しい小学校のあり方を提案している。
敷地にゆとりのある1、2層の小学校の計画であれば、教室は地面に対して距離的に近く、グラウンドと校舎の建物の関係はおのずと緊密なものとなる。地方に新しく建てられる小学校建築での体験が、開放的で活発なものであることが多いのは、このグラウンドとの関係とも無縁ではないだろう。この計画では、都市部の住宅密集地を敷地に、4、5層の建物としながらも、建物の内部空間

間とグラウンドの関係が連続的なものになることを目指し、めくり上がったグラウンドの中に校舎のポリウムを挿入する、という方法を提案している。
この建物では、どの教室の窓からも、グラウンドに出られる。建物の高層部(学年が上がるごとに、上の階にあがっていくそうだ)からも、急傾斜ながらグラウンドに出ることになる。子どもたちは斜面をよじのぼり、あるいは滑り落ち、さらには、傾斜を利用した遊びを構想するようなこともあるかもしれない。窓の脇に花

を咲かせることもあるだろう。
内部空間も、新しい体験を誘発する。手の届くような高さの天井があれば、教会のような垂直に高くのびる天井もある。空間の大きさや外部との距離の違いから、場所ごとの空間特性が独特のものになる。グラウンドをめくり上げるという単純な操作が、内部空間の多様性を生み出し、そのことが、小学校としての活動が引き寄せる独特の活発さと結びつき、新しい小学校建築の姿を浮かび上がらせている。

独特の詩的な雰囲気も備えていることも、この計画の特徴である。ともすると、安易で表層的な印象を生み出しそうな、記号的な建築要素(家型、風車、煙突など)を組み合わせながら、斜面が引き寄せる活動のイメージとを丁寧に関係づけることで、一つの建築としてのまとまりをつくり上げている。